

中国旅行後の芥川龍之介文学：「馬の脚」の世界

邱，雅芬
中山大学外国語学院

<https://doi.org/10.15017/16033>

出版情報：Comparatio. 8, pp.38-44, 2004-06-20. Society of Comparative Cultural Studies,
Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：

中国旅行後の芥川龍之介文学

——「馬の脚」の世界——

邱雅芬

芥川文学における「馬の脚」

「愛す可き過去の美術品」①に限りない愛着を感じる芥川は、「ものあはれ」の世界にも通じる審美的な「詩的精神」を唱え、架空の超現実的な神話世界を構築した。そして、ロマンチックな中国古典の世界は、その「詩的精神」を支える重要な柱となった。それがゆえに、中国旅行を控えた一九二〇年から一九二一年三月までの間だけでも、芥川は「尾生の信」・「南京の基督」・「杜子春」・「影」・「秋山図」・「アグニの神」・「奇怪な再会」・「奇遇」など中国を舞台に、もしくは中国の古典に素材を求めた作品を多く創作している。これらの作品はいずれも異国情緒豊かで、神秘的な色彩とロマンチックな雰囲気と溢れているのである。漢詩や南画、そして『西遊記』・『水滸伝』・『聊齋誌異』に象徴される中国古典の世界に育まれた中国趣味の愛好者として、中国旅行を目前にした芥川のエキゾチックなロマンチズムはいっそう助長されただろう。憧憬の対象として、中国は非日常・非現実的なイメージと結びついて、芥川文学に取り入れられていたのである。それだけでなく、芥川は日常の塵勞を遁れるために、創作の合間に南画を鑑賞し、漢詩作成に没頭している。この時期に見られる芥川の中国憧憬は非常に熱意を伴っていたのである。ところが、植民地強奪の帝国主義の時代において、もっぱら個人の殻に閉じこもる文学の行く末は明白である。矛盾も否定も知らない日本の「神話的思惟」②に根ざした芥川の「詩的精神」は、中国旅行を試みた時に、実際に体験した民族の独立と自由とを求める中国の反帝国主義の革命風潮によって、ぐらつき始めたのだ。『支那遊記』一篇に記述されたのは、まさに夢と現実のはざまに揺れる彼の精神の衝撃的な真実であり、「詩

的精神」を唱える神話構築を本質とする芥川文学の神話崩壊の過程なのである。

一方、『支那遊記』以外にも、中国旅行後に創作された中国物は、今までのロマンチズムとうって変わった現実的な作品が目立ち、さらに社会批判的な色彩を内包する作品が多く見られるようになったことも指摘できる。これは神話崩壊後の芥川文学の特徴と見てよいもので十分検討に値するのである。ここでは、中国旅行後の芥川文学における作風の変化を把握するべく、まず「馬の脚」の世界を中心に探ってみよう。

一九二一年七月に、芥川は中国旅行を終えて日本に帰国したが、それ以降、これまで熱意を持って創作しつづけた中国物は、めっきり少なくなった。紀行文『支那遊記』のほか、直接中国体験をもとに創作したのは、「湖南の扇」(中央公論一九二六年一月)だけのものである。また、「湖南の扇」は旅行前に創作された「南京の基督」(中央公論一九二〇年七月)と同様、中国美人が登場する作品であるが、醜悪をも美しく映し出すぼんやりとしたあのランプの光は、「湖南の扇」にはもう見られないのである。「南京の基督」と「湖南の扇」とを比較して、塚谷周次は「南京の基督」がキリスト教と上海という二つの要素が結合されたところの「異国趣味」の色濃い作品とすれば、「湖南の扇」の方は、長沙の革命的雰囲気、現核をさぐり出そうとするところに主題があるとみていい」と指摘している③。「キリスト教と上海」という言い方は語弊があるけれども、この指摘は大かた妥当であろう。確かにロマンチックな「南京の基督」と比べ、「湖南の扇」は政治的な色彩を帯びた現実的な作品なのである。「湖南の扇」のほか、旅行後に書かれた中国物に「母」(中央公論一九二二年九月)、「第四の夫から」(サンデー毎日一九二四年四月)、「馬の脚」(新潮一九二五年一月)及び「女仙」(譚海一九二七年六月)が挙げられる。死の直前に発表された「女仙」については、機会がある時に詳しく論じるとして、「母」と「馬の脚」は中国を舞台にしなが、日本人を主人公にしている点で共通性がある。子供を失った母親の心情を取り扱った現実風の「母」に比べ、冥界から復活した男の物語が描かれる「馬の脚」は、幻想風の作品に見られがちであるが、作品に溢れている社会批判的な思想は、「馬の脚」一篇を歴然とした現実的意義の強い作品に仕立てている点で両者は異なる。また「第四の夫から」は、ロマンチックな情緒をたたえながらも、漢詩や南画の故郷である中国江南地区を舞台に

せず、辺境地区のチベットを背景にしているのである。

こうした傾向は、隠遁生活に憧れ、中国に根強く伝わる仙人、道士に興味を持っていた芥川にはなかつたものである。彼は一九一六年に「仙人」(「新思潮」一九一六年八月)を発表し、さらに、『支那仙人列伝』にも収録されている中国の有名な仙人左慈を登場させる「杜子春」(「赤い鳥」一九二〇年七月)を、一九二〇年の中国旅行前に創作しているのだが、一貫して、仙人によく興味を示していた彼は、中国旅行後の一九二二年に、「仙人」(「サンデー毎日」一九二二年四月)と題とする作品を発表している。にもかかわらず、この作品に中国の仙人をもはや登場させず、物語の舞台も中国ではなくなっているのである。中国をロマンチックで、非現実的なイメージと結びつけるような発想は、芥川文学からほとんど消えてしまった。作家が抱いた中国のイメージが、旅行によって現実的になったがゆえに、非現実的内容の中国物は書けなくなったのである。

ところで、『支那遊記』を除き、帰国後、芥川が取り扱ったのはじめての中国物は「母」である。生まれたばかりの赤ん坊を死なせた一人の母親は、曾て上海の旅館で知り合った女も、赤ん坊を肺炎で死亡させたことを知らされ、顔に幸福な微笑が漲る。このような「母」という作品はロマンチックな雰囲気や神秘的な色彩がなく、子を失うという残酷な事実面に直面させられる母親の心情を描いたものである。作品に登場する二人の母親は、もはや「南京の基督」や「奇遇」の女主人公のように、ロマンチックな恋に恍惚とする余裕を持たない。唯、縫い物と編み物をする平凡な日常生活を送る女たちである。旅を通し、現実認識を否定なしに強いられた芥川にとって、憧憬の対象としての非日常的な中国イメージを喪失することは、「詩的精神」の文学理念を支える大切な柱を喪失することであった。芥川文学における架空の超現実的な神話世界は無残に崩壊したのである。冷酷な歴史的事実に面する作者の心情が、赤ん坊を失う母親の心情を通して、反映したのである。

しかし、非日常的な中国を喪失した一方、芥川が現実認識を迫られたことで、視野が広げられたというのも事実である。「將軍」(「改造」一九二二年一月)、「桃太郎」(「サンデー毎日」一九二四年七月)といった作品の創作がそれを裏付けている。「將軍」をめぐる、「作者はこの作品で乃木將軍の偶像破壊を」試みていたとの従来の読み④に反し、塚谷周次や関口安義等は、それを芥川の反戦小説としてとらえている⑤。

「將軍」(十一年一月『改造』)は、芥川の中国旅行後五カ月内には完成していた作品なのだが、この単調な事実が、「將軍」という作品の性格と鋭くかわつていられると思われる。ありてい言えば、「將軍」は確実に芥川の中国体験上の作品なのである。芥川の中国体験とは、とりもなおさず「排日体験」という別面を所持しているところ、確認しておかねばならないのだが、そのような中国体験の投影が、「將軍」の「間諜」には実になまなましくきざみこまれていく。

これは塚谷周次の読みであるが、さらに関口安義は「將軍」は初期プロレタリア小説として位置づけてもおかしくない」とまで批評しているのである。さらに関口は「桃太郎」という小説は、章炳麟の桃太郎観に刺激されて生まれた」という観点をも右の論文で提出している⑥。中国体験と深くかわるこの二作について、塚谷及び関口論につけかわえることはないが、上に述べてきたとおり、神話崩壊後の芥川文学に、ロマンチックな中国像が著しく減少し、その代わりに、「將軍」・「桃太郎」・「湖南の扇」といった現実認識に立脚した中味の濃い政治的作品が現れたことは強調しておきたい。作家としての芥川は中国体験によって飛躍的に成長したのである。

私見では、北京を舞台にする批判精神に溢れた「馬の脚」も、中国の現地体験がなければ書かなかつたと思われる。芥川文学において、これまで高く評価されなかつた「馬の脚」であるが、晩年にさしかつた彼の思想と文学を中国体験との関係において語るとき、極めて重要な作品だと言えよう。

「馬の脚」の世界

「馬の脚」は一九二五年一月一日及び二月一日発行の「新潮」に、「馬の脚」「続馬の脚」の題で掲載された。作品の主人公押野半三郎は、北三菱会社にとめる極普通のサラリーマンで、家庭生活も平々凡々である。しかし、冥界の役人に、美華禁酒会会長のヘンリー・パレットに間違えられて、ある日突然死亡する。やがて、間違いが判明するが、押

野の脚はもう腐っている。むりやりに馬の脚を付けられた押野は復活することはできず、馬の脚を隠すのに苦勞する。そしてとうとう、蒙古の風が吹くある日、馬の脚に導かれたまま、どこかへと走っていったという話である。

この作品の素材について、吉田精一は「ゴオゴリの『鼻』からヒントを得たのだろう」という⑦。国末泰平は「或阿呆の一生」の「十六 枕」に引用されたギリシア神話のケンタウロス「半身半馬神」説と、身近の友人小穴隆一の脱疽による足頸の切断説および遺稿「凶」に描かれている軽井沢での幻覚体験説とを提出している⑧。また、藪下明博は、中国唐代に書かれた『玄怪録』に収録された「齊饒州」に似たような部分があることを指摘している⑨。似たような部分とは、主人公が冥界から復活することを指しているのである。冥界から復活するような話は、中国の古典に多く散見し、『玄怪録』の「齊饒州」一篇に限らない。一定の期間内に、死人がよみがえることが有り得る発想は、中国の民間で根強かった。芥川の愛読書『聊齋志異』、『剪燈新話』はこの種の物語に満ちている。

中国旅行前に書かれた「奇遇」(中央公論一九二二年四月)は、『剪燈新話』の「渭塘奇遇記」を原典として、『剪燈新話』の「令狐生冥夢記」では、令狐という青年が、冥界の夢を見る話が描かれているのである⑩。その中にも、山積みされた書類の中央に坐って、冥界の書記が朱筆を持って、事務を処理している場面がある。必ずしも藪下説は当たらないのである。むしろ、社会批判的な精神に溢れたこの作品を論じる時、思想の究明がもっとも重要であろう。

さて、「馬の脚」の思想であるが、冒頭に、「このお伽噺の主人公は——「馬の脚」は小説ではない。「大人に読ませるお伽噺」である。「大人に読ませるお伽噺」などは認めない人もあるかも知れない。が、認めないのは誤りである」と書かれているところに注目したい。作品を理解するポイントが作者により提示されている部分だと思われるからである。作品に描かれている奇怪千々な物語に託された寓意は、大人社会にしかな通じないということを仄めかしているかと理解できるのである。

作品の思想という点では、国末泰平が前出「夢——「馬の脚」」で、登場人物の面前に、すでにいくつかの寓意、批判が見られると指摘していることが注目される。作品解明に重要な示唆となるゆえ、改めてここで紹介することとしよう。国末の指摘によると、寡黙な主人公押野半三郎

の名字押野は、「唾」に通じ、馬の脚になった経緯が詳細に記されたその日記は、筆談とも言えるという。「美人と言ふほどではない。尤も又醜婦と言ふほどでもない」押野の妻は、平々凡々がゆえに、「常子」と名付けられ、後に押野に「藪医者」「泥棒だ！大詐欺師だ！」と罵られる同仁病院院長山井博士の山井は「病」の意だという。「難を去つて易に就く」「天下の公道」を代表するとされる「順天時報」主筆牟田口は、「無駄口」の寓意であるというのである。登場人物の面前に托されているこのような寓意は、作者がいう「大人に読ませるお伽噺」を意味していると考えられ、国末の説はうなずけるのである。

このように、大人に読ませるお伽噺「馬の脚」に、作者の批判精神が込められていることを看破するのは至難の技ではないが、これまでの論者は、作品の表面にとらわれすぎて、その批判精神の中心となることを把握していないと思われる。たとえば、前述の藪下は前出「馬の脚」或は、幻想とアイロニーの共存」で、芥川文学における「馬の脚」の位相について、次のように語っている。

芥川龍之介の「馬の脚」が、(中略)傑作として紹介された例は現在までほとんど存在しないのではないだろうか。もっとも芥川の数多くの作品から傑作・佳作の類を選び出すことは造作もないことであり、わざわざ「馬の脚」などを引き合いに出すまでもなくテクストはそこらじゅう転がっているが、特に後期作品における幻想性、あるいはアイロニー(ここでいうアイロニーとは、勿論自嘲をも含めて考えていただきたい)を考察する上で、どうしても等閑視できない重要な作品に位置付けられる。あえて作品の出来・不出来を問うならば、どちらかといえば不出来に属す作品に違いないが、その読後の陰鬱感漂う後味の悪さに代表されるとおり、これは紛れもなく後期芥川文学の本質を衝いた極めてセンセーショナルな作品であるに違いない。

芥川文学における「馬の脚」の重要性を強調しながらも、藪下はこの作品を「不出来に属す作品に違いない」と批評し、その理由として、作者の批判精神とされるアイロニーの数々が実に多種多様であることを挙げ、「この多様さがかえって「馬の脚」の対象を濁らせ、目的不在の中途

半端な作品に仕上げてしまったのもまた事実である」との観点を提出しているのであるが、これが妥当な論であろうか。

確かに、作品は一見して、運命・官僚主義・家族主義・ジャーナリズム制度等の多種多様なものを皮肉っているようにみえる。しかし、決して「対象を濁らせ、目的不在の中途半端な作品」ではないと敢えて言いたい。主人公が突然死んでしまう件について、「世間は幸ひに死にかたには余り批評をしない。批評をするのは生きかただけである」と作者は語り手に語らせている。明らかに「世間」に対する軽蔑が込められているような発言なのである。また、馬の脚が蒙古の風に誘惑され、主人公が家を飛び出た事実を周囲が発狂だと解釈していることに触れ、語り手は「尤も発狂の為と解釈するのは馬の脚の為と解釈するのよりも容易だったのに違ひない。難を去つて易に就くのは常に天下の公道である」と言っている。ここでの「天下の公道」と「世間」とは同じような意味合いを持つているに違ひなく、語り手は「天下の公道」を代表するものを「順天時報」であるというのである。そして、その「順天時報」の主筆は「牟多口」、無駄口に通じる名字をもっているのだ。

「馬の脚」一篇で、もっとも使用頻度の高い言葉は、「難を去つて易に就く」天下の公道を代表する「順天時報」という新聞紙の名前である。短い一篇に、「順天時報」の名前は六回も出ている。「順天時報」を通して、「順天時報」に代表される世間、天下の公道及びジャーナリズムに、作者は批判の矛先を向けていると思われる。作者の意図はこの部分に特にかかわるのである。

そこで、「順天時報」が言及されている文章に触れてみよう。作品に書かれている順序によって、仮に番号をつけることにする。

① 半三郎の復活の評判になつたのは勿論である。「順天時報」はその為に大きい彼の写真を出したり、三段抜きの記事を掲げたりした。

② 当日は烈しい黄塵だつた。黄塵とは蒙古の春風の北京へ運んで来る砂埃りである。「順天時報」の記事によれば、当日の黄塵は十数年未だ嘗見ない所であり

③ 子は「順天時報」の女記者にこの時の彼女の心もちは丁度鎖に繫

がれた囚人のやうだつたと話してゐる。(中略) 半三郎は何かに追はれるやうに社宅の玄関へ躍り出した。

④ その後の半三郎はどうなつたか？それは今日でも疑問である。尤も「順天時報」の記者は当日の午後八時前後、(中略) 八達嶺下の鉄道線路を走つて行つたことを報じてゐる。が、この記事は必しも確実な報道ではなかつたらしい。現に又同じ新聞の記者はやはり午後八時前後、(中略) 石人石馬の列をなした十三陵の大道を走つて行つたことを報じてゐる。

⑤ 半三郎の失踪も彼の復活と同じやうに評判になつたのは勿論である。しかし常子、マネエヂヤア、同僚、山井博士、「順天時報」の主筆等はいづれも彼の失踪を発狂の為と解釈した。尤も発狂の為と解釈するのは馬の脚の為と解釈するのよりも容易だつたのに違ひない。難を去つて易に就くのは常に天下の公道である。この公道を代表する「順天時報」の主筆牟多口氏は半三郎の失踪した翌日、その椽大の筆を揮つて下の社説を公にした。

⑥ 彼の復活を報じた「順天時報」は同じ面の二三段下にかう言ふ記事をも掲げてゐる。——「美華禁酒会長ヘンリイ・バレット氏は京漢鉄道の汽車中に頓死したり。同氏は薬罈を手に死しゐたるより、自殺の疑ひを生ぜしが、罈中の水薬は分析の結果、アルコール類と判明したるよし。」

作品に描かれているあらゆる重大事件に、ジャーナリズム機関としての「順天時報」が関与していること、それを右の引用文に見ることができ。しかも、その報道が「必ずしも確実な報道ではなかつたらしい」と、語り手は言っているのである。作者は何故、「順天時報」を通して、世間・天下の公道を批判したのである。その背後に、中国旅行から得た貴重な体験があつたと思われる。

批判精神と中国体験

すでに述べたように、中国旅行中、芥川が一番気に入ったところは北京である。一九二七年二月五日小松芳喬宛に、「北京はよかつたでせう。僕は東京以外の都会では一番北京へ住みたい」と書いていたところは、その間の消息を伝えている。事実、芥川は北京に一カ月近くも滞在している。その宿泊先は、日本人経営のものとして北京随一の扶桑館という旅館である^⑪。北京で、芥川は中国劇を鑑賞し、中国の文化人と面会したりしている。その活動ぶりは早くも現地に出された日本人刊行物に紹介されているほどなのである。

当時、北京で発行されていた日本人刊行物のほとんどは日本語版であるが、一九〇一年から一九三〇年までに出版された「順天時報」は中国語の日刊紙である。日露戦争後、「順天時報」の経営は個人を離れ、外務省の保護にゆだねた。北京に一カ月も滞在し、北京随一の扶桑館という日本人経営の旅館に宿泊した芥川は、「順天時報」の存在を知らないはずはなかつたのである。なぜなら、「順天時報」一九二一年六月三十日付の辻聴花による「中国劇と日本人」第五回に掲載されている内容と、芥川が「北京日記抄」の「四 胡蝶夢」に書いている「波多野君や松本君と共に辻聴花先生に誘はれ、昆曲の芝居を一見す」との内容が一致している。その記事に芥川が目を通したことは十分考えられる。「順天時報」に掲載された芥川の関連記事はまだあることは、飯倉照平が「北京の芥川龍之介——胡適、魯迅とのかかわり——」で詳しく紹介しているとおりである^⑫。

帝国主義時代の日本政府の保護下にあった「順天時報」は、もちろん激動期の中国に理解を示さなかつた新聞である。芥川が北京を訪れた二年前に勃発し、後に全国的な反日運動にまで発展した、日本が中国に強要した「二十一カ条」の秘密条約に起因する五・四運動に対し、「順天時報」は、これを非難する記事を連日報道している。一九一九年五月から六月にかけて、「順天時報」は「学生の暴行」・「学生暴行と政客の煽動」・「学生暴行と司法権の独立」・「学生の自分」・「過激思想勃発のおそれ」などの論説を発表している^⑬。中国語日刊紙であつただけに、その反響も大きく、中国のインテリたちの猛反発を招いた。さらに注目すべきこ

とには、「二十一カ条」の秘密を洩らしたのはほかでもない「順天時報」であつた^⑭。反日風潮が中国全国に広がつた最中、北京の扶桑館に一カ月も滞在した芥川は、自己に関する消息を報道した「順天時報」の存在及びその性質等を知らないはずはなかつたのである。もし、中国訪問中に日本政府の保護下にあつた「順天時報」のこのような情報に触れ得なかつたら、「馬の脚」で、わざわざ「順天時報」を引き合いに出さなくてもよかつたに違いないのである。

五・四運動後の新しい中国の胎動・学生紛糾等に関しては、芥川は「順天時報」と異なつた態度を取つていたことがわかつている。北京の日本語新聞「日刊新支那」の一九二二年六月十四日付紙面に、「支那の進歩と社会教育の必要 芥川龍之助談」を題目とした記事があるが、「馬の脚」理解にかかわるゆえ、ここでその一部に触れてみることにしよう。この記事によると、学生運動に関し芥川は「学生が示威運動をやるのもよいでしょう」と自分の観点を提示している。決して、「順天時報」のように学生運動を暴行扱いしなかつた。そして、「支那には社会主義等が盛んに起つて居る様ですが、之れは駄目でしょう、未だ支那としては早いです、現在の支那は社会主義なる者を要求する時代ではありませんから」と述べている。盛んな社会主義思想を中国で現に体験していることを示唆するような話なのである。確かに、旅先の至る所で、例えば杭州や長沙で、激しい反日運動及び盛んな社会主義思潮を体験しているのだ。

この点については、『支那遊記』及び旅行中に書かれた書簡に見ることが出来る。特に、一九二二年五月三十一日滝井孝作宛に、長沙に関し、「此処の名物は新思想とチブスだ」と記しているのである。「馬の脚」が書かれた時期とほぼ重なる一九二四年十月二十二日石川太一宛には「僕は小穴隆一君と違ひ、いろいろ気の多い人間ですから社会問題でも何でも興味を持ちます」とも書いている。彼が積極的に社会問題に興味を示した背後には、中国で体験した反日風潮・盛んな社会主義思潮が深くかわつていたのである。そうした体験が、後に「將軍」・「桃太郎」・「湖南の扇」のような作品に反映されたことはすでに述べた。「馬の脚」もまたこの系列の作品なのである。

北京にいる間、芥川は中国新文化運動の旗手胡適にも会つてゐる。「江南遊記」の「前置き」に胡適の名前が記されることは、その間の消息を伝えている。胡適も芥川との会見を日記につけていて、一九二一年六月

二十七日付の胡適日記に次のようなことが綴られているのである。「芥川さんが招待したため、八時に扶桑館着き、芥川さんと食事をする。(中略)芥川はまた、中国作家が享受している自由は、日本人のより大幅のように思われ、うらやましいと言った。旅行者とは言え、何か月も滞在すると、その国の事情にある程度通じ、自国のことを改めて見なおすことができるだろう。芥川もその例外ではなかったのだ。彼は意外にも、中国の作家が日本の作家より大幅な自由を有していることに気付き、中国の作家を羨望のまなざしで見ると同時に、日本に設けられている制限に反感を覚えたに違いないのである。帰国後、中国体験から生じたこの種の反感を、しばしば作品でも仄めかしている。

私もこの新年の「改造」に、「將軍」と云ふ小説を書いた。しかし日本に生れた有難さには、油揚の憂目にも遇はなければ、勿論小使もひっかけられない。唯一部分伏せ字になつた上、二度ばかり雑誌の編輯者が、当局に小言を云はれただけである。(「江南游記」八 西湖(三) (一九二二年一月一日から「大阪毎日新聞」に連載)『芥川龍之介全集 第八巻』二三四ページ)

官憲は僕の「將軍」と云ふ小説に、何行も抹殺を施した。処が今日の新聞を見ると生活に窮した癡兵たちは、「隊長殿にだまされた閣下連の踏台」とか、「後顧するなど大うそつかれ」とか、種種のボスタアをぶら下げながら、東京街頭を歩いたさうである。癡兵そのものを抹殺する事は、官憲の力にも覚束ないらしい。(「澄江堂雜記」「將軍」(「新潮」一九二二年四月『芥川龍之介全集 第八巻』九一〜九二ページ)

これらはどれも国家の検閲制度に不満を示す文章である。このような記述は、胡適日記に綴られている内容と一致し、中国体験によるものと考えられる。話題を「馬の脚」に戻すが、自分に馬の脚をつけると聞いた半三郎が、「第一僕の承諾を経ずに僕の脚を修繕する法はない」と反発している場面がある。国家の検閲制度への芥川の不満は、半三郎のこういった話にも託されているにちがいない。国家が認めるいわゆる偉い人物に対し、作者はさんざん嘲笑を浴びせている。「博士自身の信用の代り

に医学の信用を抛棄」するに躊躇しなかつた山井博士の名字が、「病」に通じるのも一例である。国家を代弁する「順天時報」の主筆牟多口の名字も、「無駄口」になって、半三郎の失踪事件について、牟多口は「夫れわが金甌無欠の国体は家族主義の上に立つものなり。家族主義の上に立つものとはせば」「一家の主人にして妄に発狂する権利ありや否や？吾人は斯る疑問の前に断乎として否と答ふるものなり」と、人間が病気に罹る権利まで無視する社説を公にしているが、全く無駄な発言なのである。また、美華禁酒会長が死ぬ時に、皮肉にも「アルコール類」の罎を手にしている芥川は書く。山井博士・「順天時報」主筆の牟多口・美華禁酒会長を嘲笑しているというよりも、寧ろそういった人物に名誉を与えた国家を諷刺しているのである。

ところで、「馬の脚」の冒頭部に、「運命は或真昼の午後、この平々凡々たる家庭生活の単調を一撃のもとにうち砕いた」という文がある。あたかも半三郎を悲劇に導いた責任は運命に帰すべきような書き方である。しかし、運命のいたずらに見える半三郎の頓死は、冥界の役人の無責任に由来し、その無責任もまた冥界の官僚主義に起因している。半三郎を頓死させたミスに気付いた年配の役人は、事故の責任を全部後輩の若い役人に着せようと躍起になったのである。「これは君の責任だ。好いかね君の責任だ。早速上申書を出さなければならん」「困る。実に困る。」「これは君の責任だ。早速上申書を出さなければならん。」「というぐあいに、年配の役人は自分独りが責任をのがれようとしている。明らかに国家体制の柱である官僚主義を嘲笑する場面なのである。

「馬の脚」の重大事件をすべて報道した「順天時報」が外務省の保護下にあつたように、作品の主人公半三郎が所属している三菱会社も、明治維新後、政府御用の海運業者として著しく勢力を拡大したものととして設定されている。共に政府御用の「順天時報」と三菱会社とのコンビにも、国家体制を諷刺する作者の寓意が込められていると言えるのである。

このように、主人公が冥界から復活するという幻想風の「馬の脚」は、実は社会批判的な精神が込められた現実的な作品である。北京で発行された日本政府御用の中国語日刊紙「順天時報」は、中国の大規模な反日・反帝国主義的な風潮の中においても、中国の学生運動を非難しつづけたことはすでに述べた。それがゆえに、「順天時報」は中国のインテリたちの猛烈な批判を浴びなければならなかつたことも述べたのである。現地

で、このような情報に触れ得た芥川は、日本の国家体制及びその管轄下のジャーナリズム制度に大いに疑問を持ち、次第に社会問題について深く考えるようになったと考えられる。「必しも確実な報道ではなかったらしい」「順天時報」の記事で展開される「馬の脚」は、「順天時報」を媒介として利用して、帝国主義の時代における日本の国家体制に高らかな嘲笑を浴びせかけているのである。そうしたことの背後に、芥川の中
 国旅行の实地体験があったことは繰り返すまでもない。一九二一年の中国体験がなければ、社会問題が取り上げられるこのような批判的な作品を、芥川は創作しなかつたに違いないのである。ましてや、「馬の脚」という題名自体、意図的に隠そうとしていることが暴かれるという「露馬脚」という中国の表現（日本では「馬脚を露わす」という）に影響されたものである。後期芥川文学の批判精神及び深い思考力が反映される「馬の脚」こそは、芥川全作中においての傑作と評していい作品である。

- ① 「松江印象記」一九一五年。『芥川龍之介全集 第一巻』（岩波書店 一九九六年六月）一四一頁
- ② 大嶋仁「日本思想を解く——神話的思惟の展開——」（北樹出版 一九八九年七月）
- ③ 塚谷周次『支那遊記』考——芥川竜之介の中国体験——（『北海道大学近代文学論叢』一九七一年十月）十四頁
- ④ 田中実「將軍」（菊地弘他編『芥川龍之介事典』明治書院 一九八五年十二月初版発行。ただし本論は二〇〇一年七月増訂版によつた。二五六頁）
- ⑤ 塚谷周次「將軍」の位置（北海道大学「国語国文学研究」四十九号 一九七二年四月）五五頁
- ⑥ 関口安義『芥川龍之介』（岩波新書四一四 一九九五年十月）一五六頁
- ⑦ 吉田精一「芥川龍之介の生涯と芸術」（『芥川龍之介研究』筑摩書房 一九五八年六月）三二頁
- ⑧ 国末泰平「夢——馬の脚——」（上田博他編『日本文学と人間の発見』世界思想社 一九九二年五月）一四九頁
- ⑨ 藪下明博「馬の脚」或は、幻想とアイロニーの共存（『芥川龍之介 二 舞踏会』洋々社 一九九二年）二〇八頁

- ⑩ 『中国古典文学大系第三十九巻』で、この物語は「地獄の夢」の題目で日本語に訳されている（平凡社 一九六九年十一月）一九頁
- ⑪ 扶桑館は北京王府井から遠くない東単牌楼大街にあった。田中憲一の指摘によると東単には、芥川を中国に派遣した大阪毎日新聞社の北京支局があったという。『北京歴史散歩』徳間書店、一九八八年六月）二三頁
- ⑫ 飯倉照平「北京の芥川龍之介——胡適・魯迅とのかかわり——」（『文学』一九八一年七月号）十九頁
- ⑬ 飯倉照平「北京週報と順天時報」（竹内好・橋川文三編『近代日本と中国』朝日選書十三 一九七四年六月）二三七頁
- ⑭ 汪士漢『五四運動簡史』（中国社会科学出版社 一九七九年十月）八頁